

社会医療法人  
ジャパンメディカルアライアンス

# 人と人が結ぶ地域医療 東埼玉総合病院 地域糖尿病センター

東京近郊に生じた医療過疎地。限られた資源を最大限に生かすため、待ったなしで始まった診療連携。そして、地域社会の一員としての貢献を模索する基幹病院の取り組み。

医師の都市偏在が社会的問題となっているが、都心まで1時間弱のベッドタウン、埼玉県東部の利根医療圏においても、実は医師・看護師数の人口比が全国で最小レベルの医療過疎地となっている。糖尿病専門医に求められる役割も都心のそれとは自ずと異なる。東埼玉総合病院 代謝内分科・地域糖尿病センターの糖尿病専門医・中野智紀氏に、今年本格的な運用を始めた地域診療連携の経緯をうかがった。

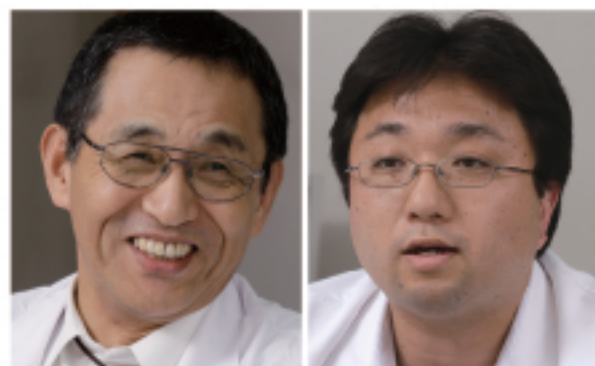
「以前は当院の医師を含む糖尿病専門医が地域の患者さんの多くを診ていました。しかし患者数の増加と専門医の流出でそれができなくなってきた。「このままでは地域医療を維持できない。地域全体で協力できるしくみが必要だと考えた」というのが始まりです。それ以降、医師会の活動に加えていただいたり、実地医家の先生方を訪問し、連携に大切な人的ネットワーク作りを始めました」。

## 糖尿病教育入院プログラムを地域に開放

病院主導の地域連携は事がスムーズに運ばないこともある。しかしここではそのような支障がほぼ生じていないという。



糖尿病チームのスタッフ。前列左端がチームリーダーの間中昌利氏。看護師で糖尿病療養指導士だ。



院長で糖尿病専門医の高井孝二氏。

地域連携システムを中心となって構築してきた中野智紀氏。

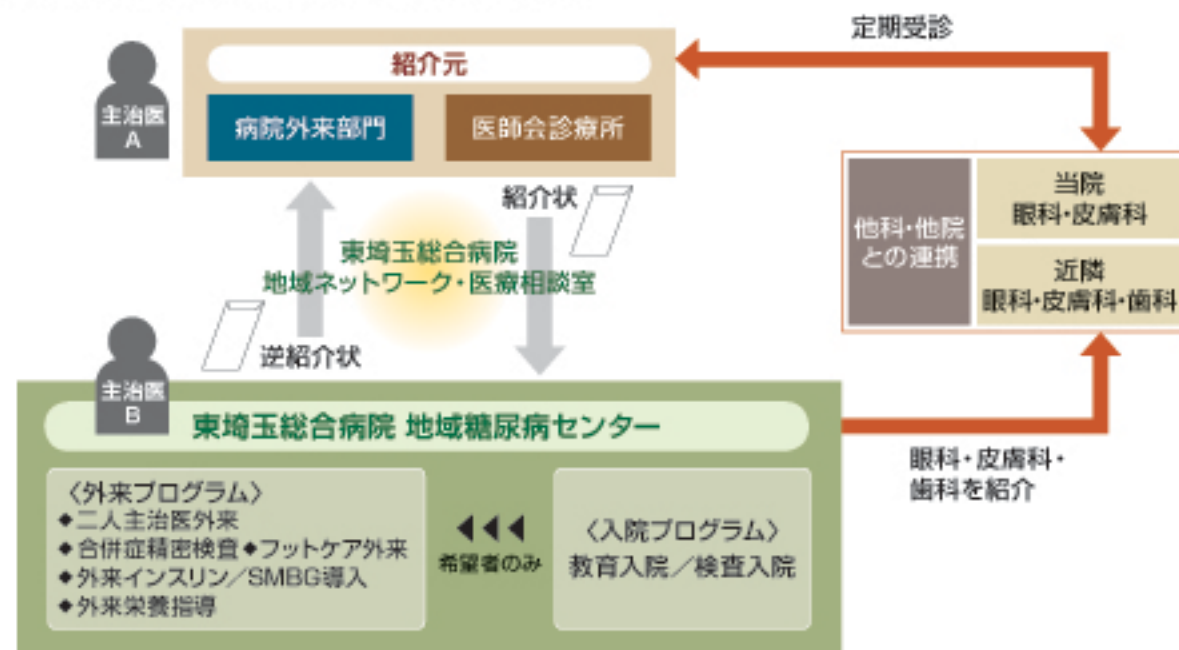
「当院が連携を主導したというよりも、地域にご指導をいただき支えられた結果、こういうシステムになったと考えます」と、院長の高井孝二氏は語る。同院中心のシステム作りではなく、あくまで医療圏全体の糖尿病患者をどうするかという問題の解決を主眼においた取り組みが共感を生んだのだろう。高井氏はこれを「地域の善意」の支えと、それに応える「医療の責任」の表れと表現する。

「実際の活動は、当院の医療資源を地域に開放することから始めました。具体的には3泊4日の糖尿病教育入院プログラムを、当院の外来を介さず自由に利用できるようにしたことです。それにより地域の先生方と安心して紹介・逆紹介できるようになりました」と中野氏。そしてこの動きが、実地医家と専門医が協力して一人の患者さんを診る「二人主治医制」へと発展する。

## 連携パスによる二人主治医制で機能分化

教育入院を終えた患者さんが「またここで診てもらいたい」ということは少なくない。そんなとき中野氏は「いつでもどうぞ」と答えるという。そして二人主治医制の説明をし、必要なら半年後、1年後の長期予約をとったうえ、元の主治医へお戻しして

## 東埼玉総合病院糖尿病地域連携システムの概要



いる。逆に、専門的治療が必要な患者さんは、連携パスに基づき早めに紹介受診させるという体制も、二人主治医制によって確立された。

「二人主治医制とは、要は地域での役割分担です。実地医家の先生方から専門医が診るべき患者さんを気兼ねや不安なく送っていただけるようになれば、我々は適切な時期に必要な治療を提供することができます」（中野氏）。

同院の総合受付には、周辺診療所の紹介パンフレットが多数置かれている。地域の診療所と同院がしっかり連携していることを患者さんに知っていただき、不安を軽減するためのものだ。連携分野は内科に止まらず、眼科や皮膚科、歯科へと広がりを見せている。

## CDE中心のチーム医療で質の高い診療を実践

専門病院の同院は、当然ながら地域からは質の高い診療が求められる。

「当院の糖尿病チームは内科医のほか、看護師、薬剤師、栄養士、理学療法士、ソーシャルワーカーなどで構成され、糖尿病療養指導士（CDE）も5名います。また他科の看護師にもCDEの資格をとるように働きかけています。脳外科や整形外科などにも糖尿病患者さんが少なくないですから」と語るのは、糖尿病チームのリーダー、間中昌利氏。同院の糖尿病チームのリーダーは、医師ではなく看護師だ。

単に、医師中心ではなくチームで患者を支えるという理念から、このような仕組みになった。糖尿病チームでは、すべてのスタッフの役割と責任が分担されている。さらに電子カルテを活用することで情報交換や、日々の診療の質的向上をめざしているという。患者さんにより長く接することの多いコメディカルが主体となり、医師にはない視点で患者さんをサポートしていくという共通の意思が既に醸成されているようだ。

## 市民公開講座で住民と問題を共有する

ひとまず順調にスタートした地域連携。このシステムをしっかりと根付かせるための施策も同時進行で始まった。毎回約100人が参加するという月1回の市民公開講座がそれだ。テーマは糖尿病に限らず健康情報全般。講演の最後に必ず、地域医療圏が抱えている問題についてのタウンミーティングを行う。もちろん公開講座は一次予防のためのポピュレーションアプローチでもある。

「今、いろいろな意味で地域社会が崩壊し始めていますが、その中で医療が成し得る役割を考え孤軍奮闘している人はたくさんいます。その人たちの繋がりを作り、市民を主体とした対話と支え合いの医療の実現を目指し、良い地域社会にしようというのが我々の活動のベースのように感じています」。こう語る中野氏。医療スタッフの熱意と地域の善意を受けて、その繋がりはさらに拡大しつつある。